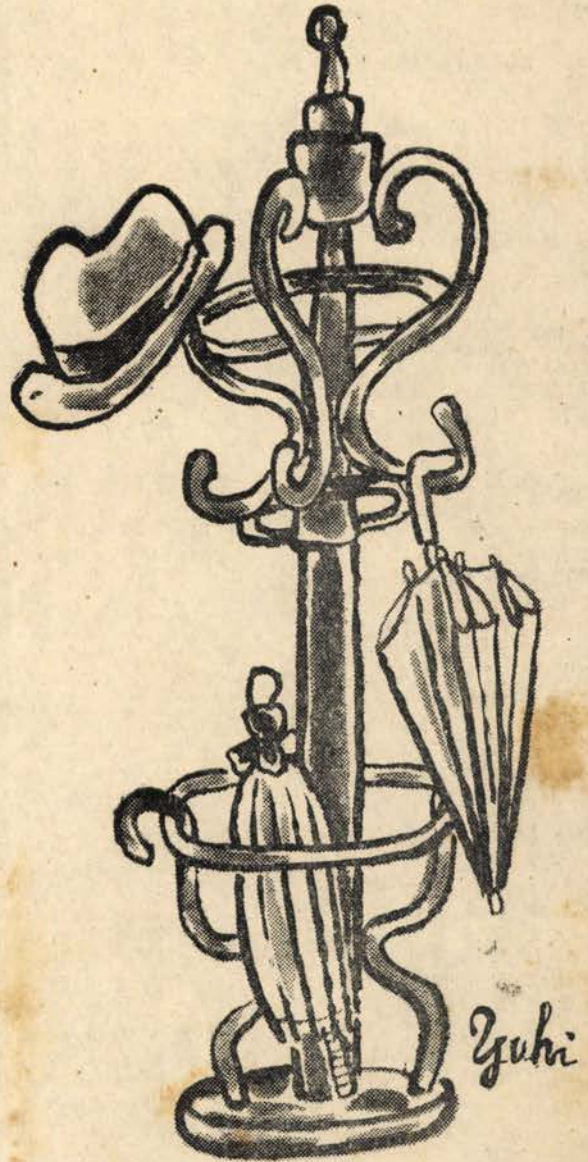


Pensoj flugas trans la land - limon

Senryu Zasshi

麻生路郎 ☆ 主筆



五月號
No.276

昭和廿二年七月一日第三號郵便特認可 (每月一回二頁發行) 創刊大正十三年・通卷二百七十六号

川

柳

の 雅

証



川柳航路

——談座——

出席者

麻生路郎

高鷺亞鈍

水谷鮎美

須崎豆秋

戸田古方

大西野介

(この時古方出席)

鮎美「然し私が七面山氏に要求することは、川柳をもう一つ掘り下げて頂きたい。さういふことはそれによつて七面山氏の句をレベルまで引上げるように……」

亞鈍「私は七面山氏の柳歴もどの程度までの作家であるかも、存じませんが……」

鮎美「それは私も存じませんが……」

亞鈍「存じませんが、川柳を掘り下げて欲しいという鮎美さんの言葉に対して尙反問したい。掘り下げたり、生きたり(川柳に)する鮎美さんのいう柳魂は、要するに川柳の魂ということで、魂はこゝ川柳以前の問題になつてくる。するに川柳の魂と言つたつて川柳がなんであるかがわからないとすると魂もわからないから、結局こゝでは川柳とは何なんですかと鮎美さんに聴きたくなる……然しこゝ云う問題は、先に前置きで先生が注意されたように六ヶしい研究討議になつてくるから、お互にやめましょう。ですから川柳に就ての定義はあんたからお聴きしますまい。」

只僕としては先に提出された豆秋さんの言われる処の肉体文学の川柳の世界にあつてもテーマとしてとり上げたという新しい時代の文学意識を

買いたいと思ひます。

鮎美「今、亞鈍氏の言われる新しい意識とは？」

亞鈍「それは豆秋さんが言われたでせう。古川柳から集めたエロ川柳、末摘花、この相違、それは現代の川柳として古川柳と一線を劃したところの肉体川柳をいうんだ。」

豆秋「七面山氏の肉体川柳は近頃流行の肉体文学に便乗しているとは決して思つてゐません。川柳の主材は自由で廣くあらねばなりませんので、こゝろした肉体川柳の存在も一應認めていいと思ひます。古方「おくれて参りましたからお話がどういう風になつてゐるか存じませんが、私もかねてから七面山氏の作品には関心を持つておりました。一月号の同氏の句に、パイブルを持つ者同志にえ切らず

三月号に
承らへたお蔭でチーズマヨ
ネーズ
七面山

この二つは同じものを狙つてゐるのではありませんが、少くとも今話題に上つてゐる肉体川柳というものは、かなり距離のあるものだと思ひられます。だが、しかしそれなれば肉体川柳ならざるこれらの句が肉体川柳家といわれてゐる同氏の作品として見劣りのするものかという決して

そうではありません。

鮎美「同感！しかしねエ難

豆秋「今、路郎師の指名により私が司会することになりましたが、先ず私から提出させて頂きましょう。一月号川柳塔の
未亡人太つた體見つめられ

七面山

七面山氏は毎号色つばい句を發表せられますが、人間生活に大事な、——大事などいふとおかしいが——情慾を汚い物扱いすることはむしろ卑怯な事で同氏が「末摘花」にならぬように確かなる一線を劃しつゝ肉体川柳に精進せられてゐる事は注目される。新年号にはこの句の他に

未亡人一度落つれば瀧に似て

七面山

という句があります。句とし

ではこの方がよろしいが「太つた體見つめられ」の方は今まで發表せられたキツス、裸體、抱擁等という酷しさでなく平凡な題材ながら句全体から情慾感を出してをり、同氏の目指す肉体川柳としては惹きかきがあります。

鮎美「肉体川柳は、一應うなづけるけれど川柳人たる柳魂はうなづけない。」

亞鈍「鮎美さんの言う柳魂とはどういふことですか？」

鮎美「柳魂は本當に川柳にひたむきな人間、誤して川柳に生きてゐる人間、とこいう事が言える。我々はさうした人間でなくてはいいかん。」

亞鈍「話が、この句から離れますが、柳魂という非常

に根源的な問題になつてくる。それでですネ。柳魂というこゝを鮎美さんの説明によると川柳に生きるといふことですね。

鮎美「え、そうです。」

亞鈍「いふことになれば、川柳にも色々の立場をもつて川柳を書いてゐる人々がある。」

鮎美「そうですね、そうです。」

亞鈍「さうした場合、川柳の一應定つたカテゴリがあつて、その範囲内で七面山氏が肉体というテーマをとつてこの句を謳われることは、何も川柳に生きるとか、柳魂がど

うのかいいう事とは関係なく、それは七面山氏の立場として認めてよいことだ……」

誌に於て肉体川柳を發表されて
いる七面山氏を實質に於て
疑いたい。古方さんの言われ
る通りに堀り下げればそも
言える。七面山氏は周囲の事
情もあろうが推察すれば自己
を亡却しているのではないか
古方 〳〵なぜですか？

鮎美 〳〵それは七面山氏はも
つと川柳塔に出している以外
の個性をもっている男ではな
いか？

古方 〳〵然し先程私が取り上
げましたような句を見ている
とそれらの句が相当の優れた
句であること、その優れたも
のは何処から來ているかとい
うと氏氏が持前の自由奔放さ
を縦横に疾駆した結果、現れ
てきたものだと思ひます。そ
の説明になりますが、その自
由奔放さというもののこそ何人
も持つてゐる人間性の一歩深
い処から出ているものなので
す。

鮎美 〳〵古方氏の今言うこと
も鮎美氏が先に言つた堀り下
げ方が足りないという両方の
意見は解つた。こゝで僕は一
應僕の立場から両氏の立場の
相違を指摘してよろしいか？
鮎美 〳〵どうぞ。(笑聲)

鮎美 〳〵(笑い乍ら) ええと、
では鮎美さんの方から言わし
てもらふとして、あなたの川
柳の堀り下げ方が足りないとい
言ふことは川柳に対する態度
がはつきりしないという風に

解釈したのですが、そうじや
ないですか？

鮎美 〳〵(無言)

鮎美 〳〵私はそう解釈して一
面川柳に対する態度がはつき
りしないのに、肉体川柳を書
くなど怪しからんといつた鮎
美さんに對して、古方さんは、
先に同氏の作の肉体川柳であ
らざる処の「マヨネーズ」の
句等を引用されて不韋放言な
肉体といつたテーマにさらわ
れないで、色んな句を作り得
る作者としての自由奔放性、
それが七面山氏の個性のよう
に言われたと僕は解釈するん
ですが、つまり両氏の意見は
七面山をとり上げて、鮎美氏
は川柳それ自体の個性を偏執
的に見、古方氏は作者の個性
を突いて、川柳以前の人間内
部に持つ自由性をいつてい
る。そしてそれら両氏は何れ
も七面山の個性そのものに究
明するところがないんです
よ。

(鮎美、古方、發言、鮎美の應
酬、議長、豆秋氏を呼ぶ。
騒然として筆記とれす)

豆秋 〳〵それは、それまでに
して、先生に一寸肉体川柳に
就いて何か、
路 〳〵ぼくは、今でも恋愛
するぜ(哄笑)

鮎美 〳〵それはそうだ。先生
の還暦の句に「六十一まだ情
熱は燃えに燃え」と言つてら
れるからなア。
豆秋 〳〵先生には「喰べさし

を喰う程男惚れている」「名
を捨て、十七八の恋もせん」
なんかがある……それでは大
いに一つ……。

路 〳〵いろ／＼七面山君の
肉体川柳について意見が出た
が私は同君の肉体川柳に就て
は関心を持つてゐる。「末摘
花」とは一線を劃して肉体川
柳をぐん／＼作句してきた七
面山の態度には僕は或程度の
共鳴をしている。大体川柳塔
は二十句という制限があるの
だが、七面山君の投句数は一
回百八十句位の肉体川柳を送
つてきてゐる。(ウァーと一
同驚歎する) 私としては規
則違反だが、その熱意に動か
されて選句してきた。かなり
色んな方面の読者に関心を持
たれたことは諸君は知らない
が、——これは文学の領域に
属するものとして倫理的な観
念を超越して作句してよいの
ではないかと思つてゐる。最
近や、行き詰つてきて他の領
域に出ようとして私信を寄こ
して來たので長々と返信を出
したが、僕はこの作家は前途
洋々たるものを持つてゐると
思ふね。作者は警察官だよ。
鮎美 〳〵へえ／＼そうですか、
そう見えませんネ。

鮎美 〳〵年配の作家らしいネ。
豆秋 〳〵四十は出てゐるでせう
ね。この句なんか、若
いものには書けませんな。
路 〳〵しかもこれ丈のもの

を詠むだけの熱と力をもつて
いるのであるから、他の句境
に進出して、おそろく相当
の力を出し得るだろう。

鮎美 〳〵先生！其処です、
鮎美さんの柳魂というものを
先程から二度も三度も問いつ
めたのは……川柳に對する
熱、その点をどつてむしる柳
魂といいたい。それはボキン
と折れるフレキシビリテのな
い柳魂かも知れないが、少く
とも現在もつ熱、そのことは
永年作句してゐるマンネリス
ムに陥つた作家の情眼した川
柳魂をリョウ鴛する処の新人
の柳魂を私は讃美したいです
よ。

鮎美 〳〵柳魂は結局一社を支
持するということによつて最
もクロイズアップされ、柳魂
は新たな人を作つてゐる
というのを僕は言いたい。
古方 〳〵そこで僕が言いたい
処があります。人民が藝術に
接觸したのは何時であつた
か、浮世絵と末摘花の徳川中
期ではなかつたが。

路 〳〵僕は鮎美君の柳魂論
は他日ハツキリお聴きするこ
とにして肉体川柳というもの
は川柳から除外されるものでは
ない。処で個性ということ
は七面山君が肉体川柳を詠む
から肉体文学が個性である
とは言えない。肉体文学を詠ん
でも、その詠み方に個性が出
てくる。又以外の句を詠んで

も個性が出てくる。肉体川柳
を詠むからそれがその人の個
性であるという考え方は間
違つてゐると思う。

鮎美 〳〵私は七面山氏を知ら
ないから、只誌上で句を読ん
でいるだけなのでそういう感
じを受けるのです。
路 〳〵肉体川柳にあればだけ
突き込んで詠んでゐる作家が
他にあるかと言ふのである。
そうすればそこに一つの七面
山としての道を開いてゐるの
だ。それを認めてやらなきや
いけない。

豆秋 〳〵肉体川柳は大変賑
かでしたが(笑聲)この辺で
止めて、さて批評も亦創
作なりという通りに野介さん
は昨春秋頃の句評「東西南
北」で「僕は川柳のフイクシ

男女両性に作用する

プレホルモン

塩野義製薬

皮下注射・錠劑



SHIONOGI

ヨンの構成に興味を引れる」

と前提しての名批評をせられ
ました、その後全國の各柳
誌にフイクションというの
がよく目につくようになった
と思います。そこで名批評家、
野介さんにつ。

野介「今晚の提出句は川柳
塔と近作柳樺からということ
でしたが、私は不朽洞句帳か
ら路郎先生の句を頂きました
椅子の背にもう青春が消えて
いた

路郎

この句は新しい川柳の方向
を示唆しているように思ひま
す。若しこれが顔の小皺に青
春が消えているとか、指先の
やつれに青春が消えていたと
か言うのでしたら、一向に面
白くないのですが、椅子の背
に、というところに何とも言
えぬよい感じを出している。
野介「良い感じ位では承知
しねえぞ。(笑聲)」

野介「待つて下さい。まだ
続くのですよ。この場合、椅
子の背というのは主人公の生
命の場であり、生活の座であ
ると私は思います。永い生活の
苦闘、それによつて青春をす
り減らしてしまつた人間の在
り方に対する鋭い批評がなさ
れていると思います。この批
評は非情の情といいますが、
川柳の持たねばならぬ非情性
を明確に表現されていると思
います。

野介「川柳に持たねばなら

ぬ非情とは突つ放すようなも
の。

野介「まあ、そうですね。し
かしこれの説明をすれば川柳
の根源的な在り方に対する解
明がなければならぬし、座
談会では無理だと思います。簡
單に言えば、川柳は批評であ
るという意味に於て自然発生
的なナマな感情であつてはい
けない。なんらかの否定によ
つて媒介された感情でなければ
ならないという程の意味で
す。

鮎美「適評は「君見たまえ
蒔草がのびている」「二階
を降りて何処へゆく身ぞ」そ
れを解釈する人に聞きたい。
そこで川柳の水準を高めて
頂きたい。……(野介と鮎美
と互いに言はんとするところ
先を争ひ再び筆記不能)」

路郎「おい、筆記がボ
カンとしているぢやないか。
筆記がとれなくちや君らが
くら喋つてもこの放送は停電
と同じだよ。(笑聲)」

野介「ではもとに戻つて椅
子の背の解釈をつづけます。
この句はなほその上に椅子と
青春という二つの繋がり、内
に相應の距離のある言葉を相
互否定的に媒介せしめて、見
事に一つのイメージを打ち出
している、そのどこに詩の
究極にある純粹な詩を感じさ

せられました。

野介「椅子の背に」の先
生の句は先生近來快心の作の
ように思つていますが、以上
両氏の批評について先生の御
意見は如何で御座いますか。

路郎「大体「椅子の背」に
對する批評は野介氏の批評に
盡きている。この句が良いと
か悪いとかは世間の批判に挨
たねばならないが、僕自身か
ら言えば相当自信をもつてい
る。この句をよく理解してく
れたのが、野介君であり他に
も理解していられる人々があ
ると思うと嬉しい。僕はこれ
からも一層精進したいと思つ
ている。雑誌に句を掲載して
も僕自身でもう一つと思つ
句もあるが、ある程度句を発
表しなければならぬ立場
上、出している。然し年に一
句や二句は快心の作を発表し
得ることは是非続けてゆきた
いと念願している。

野介「鮎美さんが、先生の
「蒔草」」「二階を降りて」
の句の御提出もあつて、先生
を前にして甚だ僣越ですが、
お許しを願つて、先生の句を
いろ／＼堀り下げてみては如
何でせう。

路郎「お許しを願うとか願
わないとかは個人的な問題で
あつて、作品に対しては遠慮
会釈なく批評して頂きたい。

僕は作家に対しては忌憚なく
批評している。所謂社会的な
エチケツトと作品の批評とは
別個の問題である。

野介「待つた。マツタ！
(路郎がまわす続けて)」

路郎「努力して作句してい
る僕の作品が邪道に陥り、
諸君の作品を充分に批評し得
なくなれば、いさぎよく柳壇
から退きたい。
鮎美「いや！それは先生の
思い違いです。
野介「待つて」(と鮎美の言
わんとするを押し)「豆萩が
お許しを乞うとか、鮎美が先生
を崇拜している氣持は先生だ
つて知つてゐる、リンゴの氣
持だ(笑聲)」——そういう門
下生を惹きつけてゐる路郎師
を僕は更めて見直しもしよ
う。だがそれは先生のいうよ
うに個人とか人間としてしか
みていない。

鮎美「(嗚咽するように)僕は
人間ですよ、いや人間性なん
だ。人間は詩人である。人間
性は川柳人である。
野介「(持てあました如く、
靜かに)然しながら路郎師を
知つたのは川柳縁でしょう。
鮎美「なに、エンヤ
野介「そうだ。川柳がざり
もつた縁、因縁だよ。
鮎美「それは皆そうです。
だつたら……」

野介「だつたらは、こつち
が言いたいところだ(笑聲)」

野介「だつたらは、こつち
が言いたいところだ(笑聲)」

野介「だつたらは、こつち
が言いたいところだ(笑聲)」

野介「だつたらは、こつち
が言いたいところだ(笑聲)」

野介「だつたらは、こつち
が言いたいところだ(笑聲)」

して、言い換えるに川柳に生きている凄まじい鬼と化した路郎師の姿、その両面をマツチすることによつて、川柳人のあり方を如実に具現化した唯一のものであり、路郎師の川柳こそ人間であり、路郎師即川柳は、この人を見よだ。

鮎美「わかつた。(嬉しそうに) 実に関西の……」

鮎美「いや、関西など客なことをいうな、日本、それは路郎師の川柳は世界的といつても過言ではないと僕は信ずる。そこで私はその点からいつて野介の提出したこの句「椅子の背」は路郎師の人間と川柳とのマツチした処の本当の川柳である」と私も解したいのです。私は野介が提出したから、情無しながら野介に花を持たして置く。最近先生の句に何かもの足りない感を抱いていた事を正直に先生のまえで告白しますが、しかし、

「椅子の背」の句はそれらの氣持をこの一句によつて一掃されました。野介や豆秋の激賞するところに便乗していうのではなしに、かつて先生の名句と言われていた「酒どろ」や「蒔萩草」に匹敵する名句だと思ひます。但し時代の相違、環境の相違は自らこの句にあるのは認めねばならぬが、少くとも廿五年度の現在の路郎師を語る名句の一つとして將來も銘記されるでしょう

いと言うことですね。
鮎美「そうだ。野介はむづかしい説明をしていたが、椅子の背というフイクションは椅子という空間(場所)と、背という時間(人間性)とそれをつなぐものにおさめてしまふこの消えてゆくは人間は生きつゝあることが死につゝあるという人間の具体性を把握して巧みに川柳の核心(野介の非情性)を突いています。」

鮎美「その点、野介氏の言うことは鮎美のいうことであり、野介のいうことは鮎美のいうことであり、路郎師の言うことなのです。」

古方「待つた! (皆の熱につられ) 鮎美さんの言葉の中に総て言い盡されているが、私は私なりに表現させて頂きます。生きつゝ、死につゝと言われましたが、「椅子の背」の句の青春は消えていつたとありますが、消えておりません。青春はハッキリ甦つて居ります。否生れて居ります。私はそれを先程の先生自身の言葉の中に見出したのです。」

鮎美「それは、その通り、生きつゝ死につゝは、死につゝ生きつゝと逆に言いかえても同じであつて、刻々に生れ刻々に死に、刻々に死ぬことが刻々に生れていく、人間絶對の姿。それは路郎師にあつて、川柳は路郎師が肉体に於

て消えようとして居るこの句をそのまゝにみてはいけないうる青春は路郎師の場合、逆に消えずに燃やしているといふ解してもよいでしょう。」

古方「さつき先生が言われたことに、鮎美さんが取り消しなはれと言われたが、あれは取り消さんでもよいのです。先生はなぜ偉いか、あれを言われるから偉いのだ。句の上ではクソカスに言へ。それが偉いのだ。それは今も四十年前も同じだ。だから一本に生きられたのだ。」

野介「先生は、自分に根源的なものに対して絶えず問い続けつゝあることによつて永遠に青年である。」

鮎美「私は路郎師に一句を残せといふことを言われて一句を残すことに猪突邁進している。だが今だに一句を残せないところにはやはり路郎師に師事してゐるのです。」

鮎美「藝術、いや路郎師の名句といわれている川柳は、何時の時代でも甦り、生れ変わるものと解釈する限りは、結論として、俳句が第二藝術であつても川柳は第一藝術であり、何時の時代でも人間と結びつく文学として、川柳はその時代／＼に生きるであらうと私は信じてゐる。野介のいう永遠の青年と路郎師を評したが、青年は可いが、永遠という言葉に一寸僕は引つか、

りたくなつたので、僕は僕流に路郎師を見させてもらいました。」

豆秋「先生の句に就いて語ればいくらでも盡きぬと思いますが、この辺で司會者として一寸言わして頂きたいと思ひます。」

だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと

鮎美「それは何時、何処で作られたか知らないが、今でもだしぬけに聴えるね。鐘の音が……」

豆秋「先生には旅の句に傑出したものがあるように思つて居ります。先生に期待することは色々な雑務を何とか我々が整理して先生に漂然たる旅をして頂きたいと思つていますが、われ／＼の力が足りないのは遺憾に思ひます。旅の詩人、西行、芭蕉のように先生を旅に出したいことを痛感します。」

鮎美「豆秋さんは先生の句をとり上げるごき旅の句を、ここに「だしぬけ」を激賞されますけどぬ。それは一面の路郎の句を評する範圍として僕はききたい。確かに名句で路郎の句である場合は勿論川柳だが、路郎師を西行や芭蕉のように世俗を逃避させて果して俳境に負けない川柳が樹立されようとは思ひません。先生が世を捨てず、社会の俗塵を浴び、時にそれも地方の

柳界に招かれて、久しぶりに旅に出た、とたんに宿にいて夕暮の旅情にゴォーンと寺の鐘がなつたと解したいんです。この句にはしよつちゆう旅をしている人には見失うところ、珍しく旅をした人へのみ感じられる驚きなんだから。僕としては、やつぱり、先生の一般から言われている名句の中から捜し当て、好きな句は、「さけどろ」「君見たまへ」「二階をおりて」「元旦せめて眼鏡を拭きましよう」「凡聖一如」といつた数へあげればキリがないが、そういつた先生の一連の個性から出た生活のにちみ出た句、又は子供の句、などの名句に共感したいと思ひます。」

鮎美「凡聖一如」それは實際もの凄いな句や。

豆秋「「めがね」の句も元旦の句として生活苦悶を淡々と出していて良いな。」

古方「凡聖一如」元旦の句、こゝろ知る」私は春夏秋冬、短冊の色が赤ちやけたまゝ掛けつゝけています。」

鮎美「凡聖一如」の名句、説明のできないえゝ句ですが、

豆秋「それではもうこれ位にして、どうも有難うございました。」

(梨里筆記)



堺市 中島生々庵

懇切丁寧結局銀行は貸さぬ也
折詰へ箸をつけぬは子沢山
しぼられてしぼられて愛人氣取也
それ見なはれ道頓堀で風を引き

次男新制中学入学

制服に子の肩巾のほゝえまし

兵庫縣 戸倉普天

呑み仲間と抜けて散髪して帰り

大阪市 武部香林

思案してどう／＼河へ出てしまひ

大臣もやけになつたか死ねと言ひ

精魂を母は繕ふ足袋に見せ

着つけして深を描く型になり

横浜市 福田山雨楼

社会党喧嘩で茶碗割つたよう

八十でまだ喜多村の藝者なり

首持つてねじむけられし共產党

四十の絹代静江がのさばる世

大阪へ旅することも夢の内

東京都 前山北海

実力でなかつた地位と知る遅さ

利用する丈けはしてをきおつ放し

言いたいがつかり言えぬ人が居る

一應は意見聞かれる地位となり

布哇 内藤草一郎

「アラいやよ」比左良えがくと言ふ姿

その朝のびたパーマもいちらしや

月並か知らねど映画誘つて見

愛染かつら踊つて藝術使節とか

不經織が御近所さんどすぐ馴染み

尼崎市 水谷鮎美

春雨にぬれてゆくの金詰り

ほろにがき酒とんがった女耐ぐ

髭剃つてゐると並んだ子の月謝

岡山縣 浜田久米雄

八時間労働靴を磨いどこ

旅の空櫻が咲いた話など

人生の旅を私の駅に見た

つめよつて来ればこちら規則なり

平塚市 木村孤浪

交通の呼子牛車を馳け出させ

るさ代をこぼし妻またひよこかひ

無難作に賣子千円札をとり

大牟田市 高田抱逸

競輪に負けておまけに風邪をひき

天光々の勤棒を録音とりたがり

女社長少し女工に肩を持ち

名譽職ふへて停年近くなり

ホノルル 村田流水

嫁が来てお部屋住居の淋しい日

退院と云ふ日朝顔咲きはこり

買ふ氣ではないが花屋に寄つてみる

大阪市 市場没食子

大阪弁の氣がさす席へ招ぜられ

夫婦して師の御駕へ氣を使ひ

先生昇任

窓外の景はないけど廻り椅子

名古屋市 吉田水車

かくし藝あちらを向いて娘はうたい

川維連絡所にて

大阪のテンヤワンヤを上から見

なまけ者手紙書かぬも自慢にし

大阪市 須崎豆秋

春雨ぐらい芝居裏歩く

平和とは先生でさへわかない

ピストルを腰に交通整理する

大阪の春は川端やなぎから

神さまへ腰の痛いのものたのみ

大阪市 正本水客

別居して画室は雨の音ばかり

ひとり居る晝をつぎ／＼猫がくる

哀愁のかぎりを線路のびている

春風のなかで借家を見付けてき

ふきげんな返事で猫を拂いのけ

二階から返事さくらくな人に見え

出張のかばんへ櫻ちる櫻散る

春泥のなかにポストがひとつあり

神戸市 竹内潮花

じつと寝て枕に春の音を聞く

愛人の顔さえ見えない日あり

新婚のもう奥様は道具じみ

大阪市 北川春巢

從弟結婚 (二句)

船で来る花嫁さんへ迎えの灯

百燭をつけて嫁の荷見もらい

長男學級委員となる

親馬鹿の話の種が一つふえ

奈良縣 尾崎方正

剪花を買ふ蒼白い労働者

春や春嫁いでからのひらけやう

姫路市 夷一笑

税務署の催促妻にだまつとき

春うら／＼何ぞええことないかいな

岡山縣 大森風來子

妾宅の門へ外交胸を張り

キスミークスミーク鏡台は春の色



鳥取市 中島鉄洲

老ぬれば朱の盃も先に饗け
ほんとうに御氣の毒なる腹上死
労働基準法で藝妓さんが来る

大阪府 橋本美奈子

お母さんそんな英語はありません
家柄をいつそ捨てたい嫁さおくれ
親切な傘と別れる曲り角

大阪府 水谷竹莊

貧乏な恋は盛り場歩くだけ
貞操を賣つて汚れた紙幣をよみ

廣島縣 弘津柳慶

人世の縮図を知つた交換手
おや／＼妻が洋装すると言ふ

兵庫縣 小沢史葉

病名が知れてそれからとまれる
個性なくあくどい色が春を行く
馬鹿力事務の移轉へ見こまれる

布施市 米本酔月

立退きも知らず朝顔今朝も咲き
金詰り税務署だけがハデに建ち
おつさんが三振してる草野球

奈良縣 白牛奇朗

金詰りの街スクーター突ッ走る
貸ボート春え待期の色とする
競輪へさもしき夢の覚めやらす

岡山縣 山分淑郎

子に残すもの信用の二字と決め
金に嫁し金に離縁をする女
人生を金で自由にする積り
脱税を子は幸福なものと思せず
一生を水底を行く砂のあり
格式と格式見合すると決め

高知市 月原宵明

漬物を下げ偽らぬ姿なり
春眠に浸つておれぬ官仕え
チンドン屋ふどうらやまし春の街
暴落の豚は手荒く積み出され

大阪府 種瓜平

ネオン街で逢へば話せる社長なり
ブラカード老いてネオンに無表情
終点はまだ飲み足らぬ悔があり
終点は花も舞い込むところに
死銭と思えど税吏にサービスし

奈良縣 飯降白香

いくたびか職をかへつゝ五十年
振り袖へ今日を限りの化粧して
密告を手柄の様に税吏言ひ
政綱羅列事務はます／＼はかどらず

山口縣 西辻竹青

てだてなきと知つてか靴屋手も触れず
千円札働らく者を袖にして

大阪府 竹田芦穂

魚釣を警邏も見てる麗らかさ
母親へ合せたい手に手錠鳴る
心臓の良さ大臣は肥へてゐる
友の計を聞く度毎に慾を捨て

布施市 森下愛論

予感冷たくそつと読む手紙
住宅難が二人を恋のまゝにする
ブラトニツクラブあわれ船場の眞ひる

岡山縣 丸山弓削平

灰白く／＼金詰りの思案
齢だなど凝視めれば妻笑み返し
夫殿りつけて形勢逆轉し

満ち足りた顔で天光々無言

投資りの賣る方だけが殺氣だち
退職の前を健保で歯の手入れ
ブラトニツク女さつさと嫁つちまい

岡山縣 直原七面山

接吻の歴史を説いた本が賣れ
諦めませんと娘キツチリ言つて起ち
人間の事は知らせず嫁にやり
洋裁の婦り楽しい終列車
口説かれてやはり嬉しいハイヒール
病体へ無理だよ素肌なんか見せ
こみ溜めの鶴で逐々嫁さおくれ
たやすくは落ちませんよと未亡人
まぶしくはないかと処女の素肌見せ
二の腕にかぶりつき度い夜もあり
櫻咲く路に目を病む兒を背負ひ
思ひ上りへ降職の辞令来る
老夫婦口三味線のうら／＼かさ
公報が悲劇の鍵を持つてゐた
料理屋の亭主が死んで繁昌し

岡山縣 黒田笑泉

半分は寝てゐる様に開いてくれ
にくらしい程ライバルのすまし込み
婚約のコツソリ日めくり繰つて見る
どうした事か母ラヂオ歌謡口すさび

宇都市 上林粗影

妹が顔をきかせたお好み屋
奥様は株ですつたをくやしがり

兵庫縣 石岡正司

久方の従妹喪服がよく似合ひ
お通夜には孫や曾孫の牌の音
霊柩車裏の京の街を抜け

祖母米壽を控えて逝く



鳥取市 河村日満子

二男道幸出産
むつきでも洗つてやらむうれしさよ
天皇陛下万歳戦後なりとても
誘惑へこんな婆さんでもいゝの

兵庫縣 田代尋四

自衛権の放棄でない吉田逃げ
田舎者ですがダンスも踊ります

兵庫縣 家沢薺花

スキーヤー滑れぬうちに春となり

光喫うて生活程度はのめかし

縁組の順に村では子が生れ

技手を命す但し昇給追つて沙汰

産めよふやせがこの有様の子沢山

荒つぱく振舞ふことも恋の手か

滋賀縣 黄瀬美秋

畑を打つ娘のいじらしい京なまり

仲よしでどつちもお嫁に行かせぬ氣

機関車のたまにひとりで走りたし

麗人が出たのでまげさす氣がくじけ

よそ行きというお白粉のなすりやう

岡山縣 藤本満年

花瓶から逃げ出しそうな松の枝

喉自慢冷やかすように鶯が

閑話する集いへも花は散り

新聞の記事に追われる逃避行

美人だと思ひ拘摸の手がにぶり

鉛筆のタコに一家が支えられ

好きなことさせば娘の凝り性な

きょうもまた焼酎代を稼ぎに出

栓抜きの代りになつた歯が欠ける

わが生活記録文学にもならず

熊本縣 西口如川

大蔵省溺れてるのえ振向かす

鯛買う腫は鯛などを敬遠し

お母アさん任せよ嫁ぐつもりなり

論文は書きすダンスが面白し

徳島縣 姫田夕鐘

娘の希望野球選手と申し上げ

子の貯金高歩で借りることにする

上方でもしろう意見はそれつきり

岡山縣 福島鉄兒

言いつ分はあるが課長だ負けて置く

恋人の頃のやさしさふと思ひ

隠藝子にまねられてこそばゆし

岡山縣 直原湖月

話好きお客の方がもて余し

岡山縣 黒田久米女

腹ばいで読んでる今日の儲け高

岡山縣 藤本茶々

家計簿の文化費母の趣味もあり

理窟では娘に勝てぬやうになり

合図して見合の二人だけにする

一人つ子ピント外れの羨され

母からの小包の餅白く白く

大阪市 塩浜一路

善人の家庭の鍋は譲り合い

大阪市 福本嗣骨

天職と思ふて居たに識になり

窓を開け窓を閉めて七度九分

奈良 良

天平の土にこぼれたウキスキー

池田市 太田木声

疊屋が来て喜びの日は近し

目覚しの弛まぬ音の尊さよ

兵庫縣 榎南夏六

アメリカのリズムで絹代下りて来る

入学式とても廊下が長く見え

梅チヲホラ遠く木魚の音がする

金沢市 安川久留美

あやしげな高天原に灸をすえ

北陸地方邪教符

入院一ヶ年

窓で見る月雪花は句に成らず

松山市 前田伍健

美くしい声新婚の隣部屋

日本に歌舞伎劇あり紙の雪

状態の変化は不意に入つた金

大阪市 橋本緑雨

煉炭もつきたが夫婦らない

千円札あつた筈だよ皺になり

切炭が匂ひ旅をば意識する

笑ふからついて笑ふも金詰り

清水市 富士野鞍馬

競賣にミシンが並びふと悲し

お隣の景氣大工がまた來てる

胃酸過多

胃痛・胃潰瘍に

ホルモザン錠



大阪・武田薬品工業株式会社

45粒入



窓 口

麻生路郎

句評のこと

東京のA氏から葎乃宛の通信の中に次のやうなことが書かれてい

「川柳街は中々面白いです。一流の大家から見ても同一の句があ

んなに違つて見えるのです。近頃朝日で茂吉選の短歌を見ても、

虚子選俳句を見てもヘンなのがほめられています。第三者にも「これ

れは」と思う様なものは少いもので

すね。」

本誌の読者にも、A氏の意見に共感される方があらうと思はれる

ので、一寸とりあげて見た。

算術の答を出すように、同一の句に対して、同一の句評を言うこ

ので、「一流の大家から見ても同一の句があんなに違つて見えるのです」と云ふことになるのであ

る。批評も又創作なりと云われて

いるのは句評に於て、特にそうだと云えるのである。評者はそれぞ

れの角度から句評を行うのであるから、同一句でも必ずしも同一の

句評が行はれるとは限らないので

ある。

それは多くの場合、評者の識見

による相違もあるうし、生活環境

による感度の相違もあるうし、作

句技巧を重く見るか、思想内容を

重く見るかの相違もあるうし、類

句の記憶力にも差違があるうし

集つた時のレベルの問題も考慮に入れなければ一概には云えない。

次に朝日の斎藤茂吉選の短歌や

高浜虚子選の俳句で、随分ヘンな

ものがホノられていてと云ふこと

でありましたが、これは新聞歌壇や

新聞俳壇であつて、専門誌の批評

とはいささか類を異にするもので

で、「川柳街」の句評と同一視する

ことは出来ないのである。実際

新聞歌壇や新聞俳壇の批評を見て

いると、ヘンな歌やヘンな俳句に

持つて廻つたやうなヘンなホメ言

葉がしてあるのであるが、それを

させるのはジャーナリズムの罪で

動 靜

▼本社四月例会は一日午後六時から大空文化会館で開催▼本社主催

の生駒吟行十六日午前十一時生駒

で開いた▼大阪選病院川柳会は

四月十五日午後二時から開催▼川

柳南支部句会は四月十五日午後六

時から阿倍王子神社で開催▼南区

医師会文化部柳柳会は四月十八日

午後七時から南船場舟屋で開催▼南

海鉄道川柳会は四月十九日午後五

時半から羽衣駅で開催▼大阪交通

局春日日出川柳会は四月七日午後一

時から春日日出選事務所仮泊所で

開催▼翠光居小集(奈良縣)が四

月九日夜に開催▼本社主催の句評

座談会が三月廿日夕から特殊紙器

株式会社階下で開催された以上何

れも路郎主幹出席▼ウイロー社

(ホノルル市)では四月二日午後

三時から商工会議所別室で村田流

水、竹川河舟両氏の送別を兼ね四

月例会を開催するとのこと▼川柳

下開支部三月句会が福王禪寺で開

催された▼川柳姫路支部では三月

廿六日有馬温泉へ吟行▼弓削川柳

社では四月十六日の旧弓削町童川

村合併十周年記念祭に際し、単独

に当夜川柳藝能大会を開催すると

社の黒板

▼本社に左の役員をおくこととし

た。

論説委員

福田山雨樓

金剛委員

戸田 古方

句会委員

中島生々庵

須崎 豆秋

永田里 九

土井 文彦

森下 愛論

ビヤホール

みどり

上六交叉点角西北

黒硝子

大塚硝子株式会社
山 銀 株 式 會 社
電話 四四七番

高級化粧容器には黒硝子！
ヤマギンの……



川柳町は斯く前進し

つ、ある

川柳同窓会

藤 本 満 年

田舎町の一々、十余名の柳人が集つて、川柳よもやま話をした。とていつて、何の変哲もない出来ごとになりがたい。それが因らずも「川柳同窓会」という、わけのわからぬ名称の会合であつた。から、何んとも取り上げて見た。なつたのである。川柳同窓会？……なんて、聞いたことがない。川柳学校というものも、この廣い世間にあつたはずもないし、無い学校から卒業生が出るはずもない。川柳が狂句に堕ちたと同じように田舎柳人の、世迷いごとでもあろうかと一笑に附されるかも知れない。それでもいいのである。当人たちにとつては大真面目でもあるし、消え去ることのない懐しい思い出にもなるからである。當時——といつても昭和二十四年の二月である。岡山縣久米郡弓削町という人口四千余りの山間の小さな町に丸山弓削平を中心とする直原七面山、黒田笑泉、高山朗笑という四人の川柳グループがあつた。田舎町独特の發展性のない町、そして川柳グループも、町

の性格そのまゝに、小さく固つた、小さなグループにすぎなかつた。しかし、弓削平の胸中には、「日本一の川柳町」を作つて見た平素の野心が去来して去らなかつた。三人の協力者をもつた意外にも逞ましい実践力をもつた人たちがあつた。「町の人たちに呼びかけて見よう」……そこで繰り展げられたのが全町川柳化運動だつた。声に應えて馳せ参じたものは、藤本満年、福島鉄児、葛原秀鶴、前川幻火、黒田劍策、黒田久米女、直、原湖月、藤本茶々などのほか、十余名にすぎなかつた。この十余名は、途中数名の落伍者を出した。エンジンの疲れた自動車のように、よた／＼と随いて来たものもあつた。だが、最後まで、川柳を護り通したものは右の八名だつた。

とにかく、この八名には枝が生えて行つた。枝にはまた枝が生える。出發とともに銘名された弓削川柳社はだん／＼會員がふえて行つた。二十名、三十名、五十名、といつた具合に、全町川柳化は着

着として進行したのである。その間、誰いうとなく前の八名を第一期生と呼ぶようになった。一期生があれば二期生があり三期生があるわけだが枝から枝を生み急激に膨脹していつたので、二期生以下はさて誰と誰かがよく判らなくなつた。そこで、一期生は何んとも同窓会というような、ほの／＼とした親しみが漂つたのである。

同窓会を開こう——八名の意見は一致した。そして入門満二ケ年に當る二月十八日の夜、それも思い出の黒田笑泉氏宅で、その珍しい名称を冠した「川柳同窓会」を開いたのであつた。風邪のため、弓削川柳社の中心弓削平の欠席は淋しかつたが、七面山、笑泉それに三期生の杉山一路、黒田正之などの先輩、後輩も顔を見せ、実に和やかな会合となつた。

病床から送られた弓削平の祝吟を積み上げたのち、「同窓会」の集りだけに席題二つ、「同窓会」「集い」の作句、その披露、そして座談会ならぬ駄弁会が自然のうちに、展開していつた。駄弁会は文字通り取りとめのないことばかりである。敢てその内容を披露するにもおよばない、こゝではあるが、川柳作家がある程度水準に達するには、何んといつても年期を入れることである。それにもかからず、この同窓会の連中は、僅か柳壇生活満一年に達したばかりである。それが早くも一かどの柳人らしく、川柳を論じ、川柳を

語る、いささか先輩諸公のひんしゆくを買うに慣するものもあるである。

この同窓会員八名のうち、すでに五名が不朽洞会員に推薦されている。おそらく、次の一年間には残る三名のほか、二期生、三期生のうちからも、どん／＼不朽洞会員が出てくることを予想される。不朽洞会は、別に年期の制限があるわけではなく、初心者といえども、推薦さえあれば入会は出来る制度であるから、多くの不朽洞会員を出すことが殊更に名譽でもなければ、自慢にもならない。しかし、ものには常識がある。川柳塔へ投句して路郎師の選に入る見込みのないものを、伊達や、酔興で推薦するものもないと見るのが普通である。弓削川柳社の一期生は、柳人としての年期は浅い。けれども、俳句作家として、冠句作家として、あるいは詩人として、または、独習的、柳人として、何らかの文学活動をしてゐた連中ばかりである。いわば、ズブの素人ではなかつたのである。詩型のナレ七音字文学を會得するには、可成りの下地があつたわけである。いつて、私は同窓会員たちの己惚れを鉄面皮に述べたようというのではなない。短歌、俳句、冠句、詩などの、それぞれの作家体験をもつたものたちが、柳壇に飛び込み、そのまゝ川柳に定着し、ある程度年期を入れた元の文学系に帰

らなかつたといふことをいいたかつたのである。それは、川柳には魅力がある。川柳祝讀の声を高らかにあげたいのである。川柳を祝讀することにおいては、敢て年期的の問題を問ふ必要はないのである。ただ熱意があれば足るのである。

弓削川柳社には現在、神目、加美、下弓削、上弓削、塩之内、全間の六支部と、青年部がある。毎月第一土曜日は弓削川柳社の句会で、第二以下の土曜日は各支部および青年部の句会に當るが、これでは一月月に七つ以上の土曜日がなくては、各支部の句会が開かれない。そのほか、小、中、高等学校の職員室から、あるいは隣村の婦人会から川柳の全合を開いてくれ、または、日曜日に、川柳とは、みなものかが開きたいという申込みが殺到している。個人としては、弓削町に住んでいる以上、川柳を知らなくては交際も出来ないといふので、川柳の手ほどきを聞くもの、初心者たちの、作句帳をもつて、先輩を訪れ、批判や添削をしてもらうのである。そのほか、句報「紋土」の編集會議、そのガリ切り、ガリ版、印刷、その配布、發送などその忙しいことといつたらお話にならない。それでいて、誰一人として、生活のための職務を怠つたものはない。その間また、句作を休んだものもないのである。路郎師の「川柳を呼ぶる生活」を樂しんでゐるのである。各支部の句会へは、古い連中が必ずす選者として出かける。同じ日に二つ以上の句会があれば手分けをして行くのである。たいがいの場合句会には、夜十二時をすぎ

る二里余りもある神目支部から田舎道をてく／＼歩いて帰るのである。足の裏に豆が出来ている。靴すれでビツコをひくものも出来る。全間支部では、ついに句会之夜は選者連中は泊り込むことにしている。それほどにしても、土曜日だけでは句会が開ききれない。ウイークデーも当てればならない。帯宅すれば十二時から一時である。その翌日午前六時半の汽車で岡山へ通勤するものもある。決して欠勤をしない。よくも身体がつづくものである。いやみん健康なのである。そのほか、川維岡山支部の句会へも何人かは出席し、何人かは投句するのである。そんな忙しなくしては句作する時間もなくはないが、心配は御無用、一ヶ月五百句ぐらい創るものもあるし、二百句位の作家はザラにいる。それも乱作では名句は生れない。問題はそこにある。ト年分を一ケ年に句作することも一つの恒期である。一方極めて寡作な作家もいる。十人十色である。

川柳は短詩型文学の民主主義である。自由にのび／＼と、インスピレーションを十七音字に表現すればいいのである。後世、川柳史家に、よき資料を提供するために句作しているのではない。川柳を愛し、川柳に親しみ、創りたいから創るのである。そして、一人でも多く、川柳を愛し、川柳を語る友のふえることは限りなく楽しいことである。

弓削川柳社、正確に言えば川柳雑誌社兼作支部弓削川柳社の、全町川柳化運動、あるいは、日本一の川柳町に仕上げる運動は、そうしたところに目的があるといえいいのである。

私は川柳同窓会を語るために、弓削川柳社を語りすぎた。けれども川柳同窓会は、川柳普及化の一つの話題にすぎない。その背景をなすものが大切なのではなからうか。ある句会で

氣狂いが居つて文化の村が出来
という句が生れた。みんな弓削平の顔を見た。

それから七面山、笑泉、瀬平、鉄兄が顔を見合せてニタリ／＼。さて何の笑いであつたろうか。

(おわり)

社の黒板

▲川柳の会の同人の顔振れや異色のある集りの状況をお知らせ下さい。取捨は編輯局一任のこと。

▽善意経△

詩を作る人々に

——麻生主幹に寄す——

池沢樂居

夫れ藝術は自由なり、人のさだめし傳統に、縛らるゝこそ愚かなれ。藝術何を指すべき。

眞善美をいうものあれど、それ自身藝術にはあらず。むづかしい議論わかれど、自然はその眞善美。人の藝術にはあらず、神の藝術と云はん、自然を再現せんとして、人の藝術生るなり。

模写も藝術にはあらず、その再現には誇張あれ。絵とらごととはこれぞかし、誇張はなきは非藝術。誇張は感激より生ず、感激なくんば作らざれ、強いて作るは非藝術。自然を眺め人生を、眺めて感興内に湧き、外に發して声となる、これを詩といふ、歌という、鳥虫けりもみな同じ。鴛鴦雀をさらなれや、蛙鳴蟬噪やかましき、みなそれ、興詩人なり。自由に歌ひ鳴つるに、日本の詩人のあわれさよ、詩を作るより川を作れ。小さな傳統に縛られて、小さき鼓に閉ぢこもり、狭きを深しとあやまりて、窮屈なるこそおかしけれ。

たとへば漢詩を作るにも、今人來し昔はいざ知らず、漢字並べて得々と、漢詩とよぶはナンセンス。平仄も韻も無意味なり。起承轉結あら笑止。顔をば洗い給つべし。また彼の俳句を作るにも、五七五と指を折り、歳時記出して首引きの、お骨の折れる詩人かな。連歌の發句の約束は、その／＼清算すべきなり。十七字詩は川柳の、自由なるこそまさりけれ。季節に何の縁あなき、人事をよむにことさらに、季節入れたる俳句こそ、文學を弄する遊戯なれ。詩の條件を君知るや、その條件は唯だ三つ、「感興、リズム、新し」なり。略して興、調、点と呼べ。漢詩も和歌もおしなべて、短詩、短歌とよぶがよし。俳句と川柳合流し、短句とよぶもよからずや。感激すなわち興にして、リズムは固有の調子なり、点とは重点新しなり。新しければ生命なり。夫れ藝術の生命は、新しの外になきぞかし。藝術は夫れ宗教か。

宗教は夫れ藝術か。和歌も俳句も川柳も、みなこれ一個の宗教ぞ。明治大帝の歌を見よ、良寛を見よ、啄木を、芭蕉を見よ、雪舟を、道はおの／＼異なれど、技巧の末を乗り超えて、新しあるゆゑ不朽なり。詩聖も歌聖も俳聖も、新しの詩人にたてまつる、尊号にてはあらざるか、佛作らば魂を、画面に描を点せずば、唯だ横わるむくろのみ。点に新しを表現す、十七字詩の中にえ、新しの有無を見分くるが、これがまことの点者なり、新し足らずば点足らず、その藝術は生命なし。

血圧降下に
アーケレミン

定剤
注射

血管アウトホルモンとアミン塩類

山之内製薬



あはて者窓のだしとは知らずして 大阪市志津
 ぎり／＼の生活囚人にもなれず 同
 弁論の自由ヒロヒトさんと言ふ 同
 愛情のはかなさを知りルージュ塗る 同
 お二階に上れば嫁のよく笑ひ 同
 見直してから知らぬ間に恋となり 同
 笑つて送つて呉れど轉動顔を伏せ 岡山縣苑女
 小遣を呉れる子も居り子沢山 同
 父さんが見込んでゐる地位はかり 同
 貨物車が入る仲仕の音がする 同
 良くなつてからお見舞の続くなり 同
 行きづりの男と飲んだデモの夜 東京都東夢
 子をあやす歌は母國の朝鮮語 同
 弁護士の妻君らしい人さばき 同
 一夜妻何と陰氣な朝の顔 同
 お父様やつぱりわたしは騙された 同
 喰ひ下る覺悟で家は出たものの 熊本縣斗四翁
 看護婦が故人の湯呑持つて來た 同
 考えるだけはお世辞も考えた 同
 ゆく／＼はなど母様の氣が長い 同
 眞ッ晝間手鏡をはめた人が来る 同
 私かて言わせて貰う四十過 小松市茶佛
 稅務署が恐ろしい玄關ちやんどかけ 同
 花嫁の着附男を寄せつけず 同
 花嫁の噂だんだん過去に触れ 同
 難波駅十円札を足でけり 同
 無事に金渡してはつと吸ふ煙草 愛媛縣孤峰

風つけて炭焼く山へ帰り馬
 手の平を打たせても見る姿
 続く雨借ばなしの傘と出る
 打水ヘトラツク会釈して通る
 春の床手放す軸を代へて愚痴 長野縣柳
 親も子も履歴書を書く春みちめ 同
 臍くりがまだ／＼値下り待つ堅さ 同
 戦犯に出世頭の名を見つけ 同
 溜涙まだ意地解かぬ男の子 同
 事毎に意見が違ふ倦怠期 今治市醉歩
 お、嫌だ社長の趣味はお仲人 同
 責任を回避したがる名誉職 同
 仲裁を買つて飲めるアロハシヤツ 同
 目をつむり競輪場の前は過ぎ 同
 妻ある日二号の生活に憧れる 貝塚市千舟
 附添の蔭口死ぬのを待つており 同
 第一次整理以來の勤務振り 同
 五六本お客を待たすしんし針 同
 重忠を置いてけぼりの慰問劇 同
 共稼ぎ今度は妻が拂う番 愛媛縣曉明
 母ちやんも忘れとせがむむり台 同
 御巡幸記念と矢張り儲ける手 同
 まだ安くなるよと都会から帰り 同
 見送つて出たは眞相いう心算 同
 米だけは妻の里から補助を受け 岡山縣十九平
 折れて出る潮時ちやんと心得て 同
 火の消えた炬燵の様な性となり 同
 おどおどとした小娘はないだろか 同
 銀婚の妻トーストパンに似て 同
 羨ますやうに女の話し振り 大阪市葦丈子
 ハダカシヨウ呆れながらも見てはい 同
 わがまゝの涙やつぱり欲しい帯 同
 頬冠りすれば立派なお百姓 同
 放出となつてもやはり買ひ足せず 同



川柳料理曆

夏の巻

水谷竹莊

生活詩馬鈴薯と組み茄子と組み (没食子)

夏は暑さを忘れる涼しいつめたい料理が何といつても第一です。馬鈴薯で作るヤサイサラダ、茄子の田樂、その外ハムや海老胡瓜等々色々のサラダ料理は夏の味覺をそそる第一のものでせう。その中で特に日本料理風のサラダ料理を申し上げます。馬鈴薯を茹で、熱いうちに塩をふり手早く裏漉にかけて砂糖、塩、酢で味をつけ、刻んだハムを混ぜておきます。少量のい

かを塩茹にして冷水にとり、きれいにふいて口細長く切り中央に妻揚げ子をして帆かけ舟の様に仕上げます。

キヤベツは細く刻んで水にさらします。その外に、海老かあわびか材料は何んでもよいから塩茹にしておきます。少し大きい皿の向ふに馬鈴薯を富士山の形に盛り、裾一面にさらしバセリをひき波の様にして山の前に海老かドマト等を並べ、波の上にかの舟を置きま

す。そして山の上に、雪の様に白ソースをかけ、たべる前にマヨネーズをかけてたべます。

よくもまあこれだけに切れたハムの嵩 (水車)

サラダ料理やハムエッグスに買つて来るハムの薄いの、みなさん御存じの事でせう。

あれ程あつた渡菰草これだけか (金黒子)

野菜は渡菰草に限らず生のあいだは沢山かさ高くありますが、それを料理するのゆへに焚いたりすると、一度にかさがへります。台所夏を知らせる音になり

胡瓜をきざむ音、氷を割る音、冷たいビール、サラダ料理、夏の宵の夕食はまた楽しいものの一つですが、

どうして見てもじやが芋の味 (水車)

にならぬ様うまい料理を作つて下さい。

養沢の果は梅干すきになり (孤蓬)

梅干は昨日のまんま皿にあり (緑雨)

梅干は私達の食糧に供しまして、極めて重宝なものであります。そして朝に梅干を食しますと、一日の毒を拂ひまして山野瘴氣の氣に犯されぬと言ふ説もあります。

それで現在でも田舎の旅館で宿りますと、朝食に梅干に砂糖をかけ

たものを出す処があります。

夏の魚料理は何んと言つても鰻から始まると言へませう、鰻を焼んだ旬に

眼に青葉山ほととぎす初松魚 (素堂)

は俳句でよく知られてゐます。川柳では古川柳に鰻を焼んだ句が沢山ありますので、川柳の鰻と、俳

男には別の世界があると言ふ 大阪市春雄
 高く組む足に自信があふれてる 同
 今でつか帽子脱ぎ合ふ終電車 同
 良妻賢母ザツツオールではネ 同
 死んだら終ひやとあつさり 大阪市葉光
 承諾もへちまもないと引受ける 同
 至極穩健に良妻賢母よと笑ひ 同
 怒つては損と集金タバコ喫ふ 同
 その先は聞くまい酒が不味くなる 愛知縣吐平
 逃さないつもりマダムをつくり咳 同
 親切ない、妓だ序でに幹もき、 同
 役得を意識して飲む特級酒 同
 嫁き遅れ母はダンスのせいにする 岡山縣北路
 金椽をかけた二度目の母が来る 同
 貸本の様に友達抜いてゆき 同

長男誕生 同
 初誕生ぐつと両手でさし上げる 同
 履歴書の筆執る横母へも寄り 新潟縣清泉
 下宿生近所の火事をスケツチし 同
 混浴の四人対角線で照れ 同
 満員車シャツを頼りに肌と肌 同
 起重機のいと簡單にもつてゆき 岡山縣幻火
 始業ベル一直線に吸ひ込まれ 同
 網棚へ帽子一つの終列車 同
 物みんな動き大阪目が疲れ 貝塚市庸司
 糸柳奈良はむかしのまゝかすみ 同
 共稼ぎ妻の稼ぎに追付けず 同
 不具の子に母因縁をふとおそれ 大牟田一葉
 女社長恋と金とは別に生き 同
 十五年スパナに馴れて今日も無事 同
 どの子も／＼皆口をもつ恐しさ 愛媛縣旭童
 やるものがなにもないので牛をき 同
 木枯にまかせて村は寝しすまり 同
 父一人置いて嫁けない二十八 東京都高志

手相だなんてもう古いわよと入らず 同
 盃を受けるにせわし老教授 同
 お情でくびにもならず靴古く 大阪市敬
 玉ねぎが軒に吊られて豊かさう 同
 妻古くてんやわんやが多うすぎる 同
 金詰り女の客の値切る事 高知市一徹郎
 つんとした顔憎らしく美しく 同
 三輪車次のねだりは野球器具 同
 父親の酔は意見をして見たく 石川縣光郎
 御札賣り羊羹色へハネを上げ 同
 電氣炬燵だけは停電知つてゐる 同
 流行を追ふだけ追ふて嫁きおくれ 三原市正一
 宝くちやつぱり安價な夢だつた 同
 あいさつに困る死に様してくれた 同
 サイレンの余韻冷たき弁当箱 廣島市巖
 夕刊で花の便りも見て済まし 同
 心機一轉先づ伸びをしてふけを搔き 同
 新入生帽子母にもかぶらせる 布施市柏葉
 下駄のあとくつきりついて山の國 同
 愛人と添ひゆつくりと春の街 同
 抵当の家に住んでゝまだ借る氣 香川縣迷觀子
 文化人と云われランプの生活する 同
 天下泰平島居ユガンだまゝで立ち 同
 何に効こうがいゝ二人へ湯があれ 熊本市無六
 公僕の典型清貧さを悔いず 同
 のませれば話のわかるお役人 同
 良い夢の中で目覺し野暮に鳴る 布 味東田棲
 現実は夢さど軽く暮してゐる 同
 幸福よ俺のそこにはいつ来るか 同
 仲好しになつたダンサー母だつた 横濱市智水
 立読みの自分一人にふと氣づき 同
 癒へた身を緑の風の中に座し 同
 玄関へ派手にかゝげた都山流 岡山縣至孝
 ミシン踏む針のリズムに希望もえ 同

句の鯉と、ごちらが、うまいか、
 くらべて味うのも面白いであります
 ませんか。
 煮地つくて女房鯉を喰ひませす
 (古川柳)
 初鯉くくとてまだ喰はす
 (同)
 葬礼を見て初鯉値が出来る
 (同)
 そんなのも今来ませうと鯉賣
 (同)
 金持を見くびつてゆく鯉賣
 (同)
 十兩はしまひ見せやれ初鯉
 (同)
 初鯉そろばんのない家で買ひ
 (同)
 追つかけて一升ふやす初鯉
 (同)
 初物で値も高急の松の魚
 (同)
 松魚賣る声も一とふし江戸なま
 (同)
 とめるなといふ身で駈ける初鯉
 (同)
 初鯉親仁やつぱり貰つた氣
 (同)
 鯉より女房をほめて涕をかみ
 (同)
 さう押してたまものかと鯉賣
 (同)
 初鯉一口飲めと下女(さし)
 (同)
 鯉賣釣瓶落して逃げてゆき
 (同)
 初鯉内儀こは／＼百につけ
 (同)
 俳句の鯉
 鎌倉や日蓮去つて初松魚
 (子規)
 初松魚飛ぶや江戸橋日本橋
 (如來)
 松魚荷のつづくや江戸の星月夜
 (理牛)
 鎌倉は海に花あり初松魚
 (魚)
 義秀に残り多きよ初松魚
 (超波)
 この砌り左鎌倉筋鯉
 (一蝶)

麻生路郎著 水武書房版



川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書
 本書は著者が多年のウチンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新
 指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなもの
 か」から説き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初心
 者は本書を讀くことによつて直ちに川柳作句のコツを全得する
 ことが出来る。多年川柳としてゐる人たちにとつても又好参考書で
 ある。敢て一読を薦む。

B6版 二二二頁 定價 一〇〇円 送費 金十二円
 取次御注文は 大阪市住吉區萬代西丁二五番地 川柳雜誌社
 電話口原大七五〇五〇

ストロヴに遂に投じたラブレター 同
 傳説を觀光道路眞一二つ 廣島縣愛 鳩
 ゼイタクな生活聞き聞き仕舞ふ膳 同
 賣る氣にもなれず勳章又仕舞ひ 同
 軸を背に膝を折らせるよい暮し 鹿兒島華 水
 引揚に理窟言はせぬ二月後 同
 俸給を言はず味喰汁だけの妻 同
 ステツプも下手よ妾はアルバイト 尼崎市紅 山
 霧のよる泣いて別れた夢もある 同
 女からきけばとつてもいゝ人よ 同
 上役の趣味をいさかもてあまし 貝塚市迷 郎
 高座とは違つた顔で子をしかり 同
 三角に恋がもつて会社やめ 同
 戦死した子の戒名のちぐはぐな 貝塚市幸 司
 ビーナツツ寶つた顔をホールで見 同
 湯上りの様に焼芋ゆげを上げ 大阪市草 右
 老らくの試験ニキビの子が案じ 同
 同権と違つた声でねだられる 大阪市迷 宮
 大胆なストッキングへ目をつむり 同
 原稿にない講演の咳拂ひ 大牟田風 浪
 おちぶれて派手に生きて自殺する 同
 一心を通して嫁ぐ日も近し 貝塚市勝 郎
 四疊半二人と成つた坐りよう 同
 迷宮に入れば自殺にして丁ひ 豊中市直 郎
 饗應を受けるつもり税の高 同
 買出しの頃ゾットする芋が焼け 和歌山桑 南
 明日帰る妻へ食器が皆汚れ 同
 兒童劇父のない子の肺腑つき 兵庫縣無 聖
 乱暴な野性に女崩れ落ち 同
 かくれんば又もうちの子鬼にされ 岡山縣牛 歩
 復員を頭髮染めて母は待ち 同
 微笑めば希望は沖の帆の如し 岡山縣朗 笑
 カテンヘアラ、一つになつた影 同
 長男と言ふ宿命が遊ばさず 吳市紅 兒

朝刊へ証人の名もなつかしい 同
 手をひかれずに歩きたく歩きたく 富山縣三 峯
 雨降りにあつち／＼とわたしの子 同
 反動と言はれる程の腕もなし 吳市史 球
 すら／＼と嘘が出て来る淋しい日 同
 奥さんの欠伸と会うてうろたへる 高知市一 角
 接吻の場面へ妻の肩が来る 同
 次を取る肉を見乍ら食つて居る 岡山縣ちぶね 同
 新調に近所の口をちどおそれ 同
 娘も嫁も母と云ふ字に親しめる 倉敷市千代男 同
 重役の名刺代りでケチがつき 同
 札なんて紙だ大いにのみ給へ 大阪府みのる 同
 委員会何も喋らずのどかわき 同
 春風をついて差押のトラツクだ 高知市元 馬
 春霞今日の税吏を罵倒する 同
 貨車一つまた一つ踏切はあかず 姫路市大夢子 同
 踏切の向ふより妻も老いたり 同
 土産等高くて買へぬ服を脱ぎ 兒島市鴻 峯
 余り蘭を植へて見るかと嫁の里 同
 切つてく／＼つてこれが盆栽 今治市咲 月
 借りて来た漫画を親が取つて読み 同
 草の家も長者の倉も春の雪大分縣表 情
 婦人会选择風景 同
 当選しこゝにあはれは亭主なり 同
 ニタ／＼と愚痴を税吏は聞き流し 宮崎市卯之助 同
 税金へ心安かる日とてなし 同
 同窓の年は隠せぬ皺が寄り 岡山縣娛句樂 同
 信じてる癖に別居は一寸妬き 同
 仕事より野球で知れた工場なり 岡山縣一 路
 失業を慰める氣の紅をつけ 同
 当選の父に合格の俸あり 岡山縣藤 波
 豚でない限り寝られぬ夜もあろう 同
 不貞腐るまでには行けず君と僕 貝塚市一 郎
 男らしい別れキツス軽くして 同

名所は海を見ずして鰯かな (其南)
 鎌倉に烏帽子降りて鰯かな (田舎)
 また越えむ小夜の中山初松魚 (芭蕉)
 初松魚箱根三里を上りゆく (疎山)
 ではこの位にして早速鰯料理にかりませう。

沢山種類があるので、その中から、うまいのを二ツ三ツ書いて見ます。
 鰯の刺身にとろ／＼をかけた料理法、これは、東京料理の名物の一つです。
 鰯の刺身をさいころ形に切つて山葵醬油にて和へます、別に山の芋を搗つて、大根の絞汁と、酢醬油にて搗のぼし、味を見て、切つた鰯を器物に盛り、その上にとろ／＼を掛け、青のりをふつて出します。
 鰯の天ぶらの料理法を申上げます。普通の天ぶらにせず、初めに鰯の身を切つてたゞきつぷして、王子と昆布出汁にて搗りのぼし、少量の塩を入れて葱のみじん、青紫蘇のこま／＼などをに入れて、丸めて、胡麻の油であけます。大根おろし、搗生姜をつけ出汁をそへて出します。
 この外に雄子焼、柚香焼、蒸鰯の吉野煮等々、うまい料理はありますが、説明すると長くなるので省略します。
 (夏の巻つゞく)

生活の無駄

(ハガキ募集)

いくら張つても無駄と知りつゝ、隙子の穴もあり大きくなつては寒い。思ひ切つてもう一度つろへば、寧ろもうちやんととの位置に穴があいていた。
 この間着替へさせた上衣の釦がもうちぎれていて、次男の靴はもうと／＼にすり切れた。マホンの足袋のつぎに、母親は睡眠の時間をちぎめて来た。
 長男の毛糸のジャケツの袖口が切れて来た。かたすけても片づけられ、後から後からちがしちがし行く三男、なんのことはない来る日も来る日も子供と大人の根氣くらべである。どちらが根氣負けない限り、明日もあさ／＼でも、其の次の日も同じことを繰り返すだけである。(二五・一・二稿)

不朽洞会から

(ハガキ募集)

▼中島生々庵氏(大阪府)は四月廿日から新築の診療所にて診察を開始された。およろこび申上げる。大森風來子氏が三月廿二日大阪なんば通船所へ路郎師と談話された。村田流水氏(ホルル市)は海外川橋田集の刊行を企劃され、八月頃上梓の予定。白川朋吉氏(大阪)は琴平参宮電鉄の社長を辭され、相談役として社長の後継とされ、ことなつた。後任社長は亀井榮造氏(山路関古氏(東京都)が刊行されて、一月古川柳は第三巻一歩文学と改題五月号を創刊号として再出をされることとなつた。柳誌刊行のいかん難事であるかと思はれて淋しい。前田伍健氏(松山市)の行司で四月四日夜八時、越智知二氏等の川柳放送角力が放送された。この水谷や莊氏(大阪府)は令息の卒業式で清水へ趣かれたが富士野鞍馬氏

花の春写真屋までが一すてれ 岡山市忠美
同権を勝手なときに振りかざし 同
嬉しいと云はずに少しすねてみる 滋賀縣文子
猫にまで喋つてみたい日もあつて 同
上役へ今宵の酒が憤どおる 岡山市柿平
上野公園
銅像の背中へストのビラ貼られ 同
優勝のバツジに秘めた母の愛 米子市富郎
アルバイト理性殺して儲ける氣 同
味噌汁へ別居の夫不平見る 大阪市樂天



土産

橋本緑雨選

留守番の愚痴へ土産の紐を解き 翠柳
型ばかりばかりに大きい土産もの 昌子
アメリカの土産でよ念を押し 不昧子
なじまない子に土産を出しをり 美奈子
名物をみやげに買つて終列車 愛鳩
嵩ばつた田舎の母の土産物 ちぶね
佛壇の土産へ子供は手合せ 不味
一物があつてお土産派手にする 久米女
酒臭い息は土産でこまかす氣 直郎
おみやげに出したお菓子でもてなされ 志津
子煩悩旅も土産で一苦勞 実信
お土産のそんなつもりはありせん 不二
お土産の魅力みんなが迎ひに出 喜久江
土産やる事も無いと借り損ね 如川
土産もの両手に持つて酔ふてゐる 喘六
共稼ぎごちらも土産買つて来る 丁路

課題吟

銀先を土産にしてる伊勢参り 木声
お土産にミエを厭はぬ故郷の母 娛句樂
置き土産して未練なく役を退き 一笑
お土産の札に來たのが話込み 一笑
お土産に肩を叩いて別れてゐる 芳泉
長旅になつて土産を持て余し 一路
廻り道して約束の土産買ふ 夏六
無理をした土産あつて受け取られ 醉步
手土産の要る用件に氣後れる 茶佛
お土産は浮世のキビを皆背負ひ 牛三郎
濡らしてはならぬ土産のいれこころ 笑羊
茶をよばれながら土産をつまむ也 鮎美
ふつてみてあんまり軽い土産もの 泰柳
人情の土産があつて事が済み 岳洲
乗り遅れそうで土産はやめに 一路
お土産を値切る心も旅のこと 芦穂
お土産と一緒に渡すラブレター 七面山
お土産を子等は寝巻に替えて待ち 井蛙
金策と知らずお土産れたるなり 純香
かつこうな土産がきて旅が延び 斗四翁

お土産もチツキで送る氣の輕さ 幻火
番頭に土産を持たず旅の暇 淑郎
お土産の注文が来る長出張 東夢
食ひ残す壽司が妻への土産なり 正司
退屈さ土産をひろげる雨の宿 醉月
お土産をもらう氣持で撰つてゐる 桂夢
土産だけ言傳で來る子を想い 陽々
土産屋を時間つぶしに見て廻り 葵花
義姉さんの吝けろくきに言ふやうに 日濤子
お土産を忘れた事にする暮らし 智水
名物の由來面白く買つて見る 光郎
御土産は皆んな揃つてかららるけ 笑泉
手土産がすぎて人格うたがはれ 庸司
手土産を出すでなかつた金のこと 好郎
一應は断つてみる土産物 眞步
網棚に土産が並ぶ團體車 夢晴
佳・土産物問所のような店構え 山雨樓
お土産のプランも立てゝ旅の朝 苑女
お土産がすぎて家内に苦狀が出 美秋
東京で買つて布巾の土産とし 曉舟
お土産を渡して靴の紐をとく 弓削平
軸・包装が少し汚れたみやげもの 緑雨

同
歸争はしたがつ結局値下げされ
半分しか女房月給あてにせず 大阪市桃村
自由よごニユールツク着る十八九 大阪市葉菜子
貨車に触れ今日はベッドで春を待つ 滋賀縣季贊
過去さらば汗と油のつよい冬 大阪市恒良
儲あつたらしくシヤンデリヤの灯が漏れる 大牟田雅人
それ〴〵に朝出のあとの部屋をのし 岡山縣光江
献立がつきて女房のひややつこ 大阪市茂平
いたづらを笑うてすませぬ日になり 滋賀縣明

を訪問され三月廿一日東京から通
信があつた四月三月帰阪正本水
客氏(大阪市)は三月廿六日から
山形の瀬見温泉へ出張二十日に帰
阪されたと〴〵木村孤浪氏(東京都)
はスト側ではないがストがあつた
ので三月はとて多忙裡に過ぎた
たのこと〴〵佐野ト占氏(八代市)
は四月七・八・九日の三日間、年
中行事の八代櫻祭が催されるので
その準備で忙しいとのこと〴〵麻生
路郎師は四月六日市立大阪文化会
館で開かれた大阪文化団体運営委
員会へ出席された小西無鬼氏

新会員紹介

三鴨美笑氏(米子市) 維
四月 茂乃女史推薦
林 益丘氏(ホノルル市) 維
五月 快夢起氏推薦
根南夏六氏(兵庫縣) 正
伊藤迷宮氏(大阪府) 正
集
旅行道德を昂揚する「川柳」募
集
▲旅行道德の向上に資するものを
募る〴〵〴〵昭和廿五年五月十日
投句は官製ハガキ又は同型の紙片
一葉一句
▲賞金一等三千円一名・二等千円
二名・三等五百円三名・佳作二百
円五名
▲副賞毎朝日新聞西部本社賞
▲門司市門司鉄道局旅客課「旅行
道德川柳募集係」宛

(兵庫縣)は川維篠山支部で四月
に櫻の木に電柱に短冊を吊つて川
柳運動をされると〴〵浜川久米氏
(岡山縣)は第四回月刊山陽読者
文藝の川柳第一席に當選(賞金千
円)された句は一人形は淋しわた
しも淋しい娘 選者は藤生路郎師
ら瀧玲之介氏(大阪府)は昨秋か
ら瀧病生活をされてゐたが最近
の句を寄せられた。〴〵古川麗花
氏(ホノルル市)の通信によ
ると、村田流水氏・林益丘氏・
竹川河舟氏が近く渡日される
のこと(流水・益丘両氏は不朽
洞會員)なほ不朽洞會員の藤
井友郎氏は郷里福井縣へ帰國さ
れるとのこと〴〵藤生路郎師は廣島
縣廿日市、職員會館で四月廿三日
開演の西日本鉄道人川柳大会へ西
下されたいで廿五日は川維下関支
部の句会にのぞみ、鉄道文化部
も講演されることとなつた〴〵吉岡
静一路氏は家事の都合で退会され



五世
川柳
鯉齋佃 (下)

富士野 鞍馬

天保四年己の歳、佃は遠州秋葉山奉納の狂句合の序文を、柳多留百三十二編に書いてゐる。

「階堤の柳は千三百里に植しと廣大に開ゆれども、今世に願ふ川柳は繁茂して扶桑に至らぬ所なし。是を異域の里數にせば、廣きこと彼に百倍すべし。されどその根分せし遠江なる曳馬の連にて、秋葉の御山に奉納の会庭を設しに、名にし無間の辺りて、こゝに三百、かしこ五百、三千あまりの寄句となれば、そが中より荒井殿の筋よき趣向、小笠松非おかしみの句は勝番として賞するに、葛布のをりはへて譽れを得し者は、小尾山鷹の羽をのしつゝ、光明の勝栗とほりかに喜び、開卷の賑ひしてんざ風ふに増れば、淡名納豆口びらきに風味のよきを披露して此滑稽も國産に比し世に愛給へといふ事しかり。天保己の泰待月、大江戸版己の島人、鯉齋佃」

そして佃の句は、白拍子旗色はい、方へほれの外十数句が見える。天保五年版の「川柳百人一

首」には岸姫松連鯉齋佃とし、本箱を置き読書をしてゐる画像に「和らかでかたく持たし人ごゝる」の句を掲げてゐる。この句は余程自信のもので見え、後に句碑に刻まれてゐる。

それから天保八年に五世川柳を継ぎ、その月日は判然してゐないが、十二月二十三日の水滸傳会には「梁山伯首長呼保義宋、五世川柳」として立評をし、四世が称えてゐた恒例の「梁山伯」をも継いでゐることが百四十七編に記されてゐる。五世立机は五十一歳で、(四世六十歳)翌九年正月に、升丸の主催で五世川柳名弘会が盛大に催され、百四十六編に柳亭種彦は左の序文を寄せてゐる。

「川柳の名を継ぐ五世となる者は誰ぞ、佃島佃なり。所のさまも須摩に似かよひ、明石町へも這ひ出たる程なれば、香の園の焼印押したるはんだいとかいふ魚桶に、源氏物語をとり重ね、せわしき物師走の月に枕さうしを操ひらけど、且には日本橋の家を継ぐ人格と識見を持つ

市に立ち、夕には算盤帳面を側におきなりはひ更におこたらず。其暇なきうちに彼書を読み、狂句を吟す事数年、昔の薬種屋が宗祇を請ぜし連歌の席にて、胡椒三文秤にかけて賣たる類、寛に風雅の人にじあれば先生と崇められ、宗匠と尊まるは原來願はぬ事なるを、四世の川宗故ありて其名を譲るに否みがたく、佃子の諾されたるはいはゆる以心傳心なり。かく名聲にかはらぬ子が性質なるにより、別に大会を催さず、唯月並の会を評して、名を継たるよしを披露す。そのことわりをここに記すは、彼の香の園に因ある、修紫の作者柳亭あるご種彦なり」

この会は地味に催されたのであつたが、五世の選評勝句三百句、出題十六、選者十人といふ盛会であつた。柳樽を通じて一回一人の選句三百といふのはこの時だけである。その翌月十四日玉女稻荷奉額の呉服会に

(一六四)

といふ軸吟が五世となつて唯一の句である。

五世川柳は柳亭種彦の記述の通りで、本名を水谷金藏といひ、縁亭風叟とも号し、佃島の住吉社に因んで、主宰する組を「岸の姫松連」と称えた。佃島の魚問屋の主人で、よく読書して、商賣もよくはげみ、博學物識で当然川柳宗家を継ぐ人格と識見を持つ

て、作句選評とも当時の第一人者であつたことは、はじめから永年の個時代の句風などを見て判るのである。惜しいことには明和二年に木綿が發刊してから七十四年間続いた「俳風柳多留」も、五世玄机の翌年百六十七編で終りを告げてゐる。然しその後「新編柳樽」が五世の力で嘉永年間迄五十五冊出版されてゐることは、五世の偉らさを物語つてゐる。

天保十年の秋、初代川柳の五十回忌に、例の有名な「本枯しやあどで芽をふけ川柳」の句碑を、竜宝寺境内に五世が建立したのであつたが、大正十二年の大震災で焼けたことはまことに惜しい。天保十二年には世に知られてゐる水野忠邦の天保の改革にあひ、狂句を維持継続してゆくのに大した困難に遭つたが、五世はよくこの難関を切り抜けて、四世が称えた「俳風狂句」を「柳風狂句」と改め、その名称は現代まで用ゐられて續いてゐる。

弘化四年、五世六十一歳の還暦旅行に初めて大阪へ上り、安堂寺町の加賀屋彌平次から出版された「以呂波藏新柳樽」二編に次のような序文を書いて健在振を見せてゐる。

「狂言狂句と替れども、仕組はかなじ忠臣蔵、序幕に出よとの役割に、並ぶ兜の天窓數、つなげぬせりふもすつぱりと、遣る氣で筆の鞘とれど、松切ほどの手際もなく、三段しだんもとんだ工夫、口から出次第野鉄砲、かく氣で腹に覺悟をきめ、釣鐘籠の明りをてらし、こま／＼とした長文句、道行とてもつり合す、地口でもなく、洒落でもなく、伊吾が寝言に異なられど、うへからしめ長持の中は旨味の打入る道具、滑稽たつぷり色々にて、面白との評判あらば、書林は幸ひ本望とげ、後日も書かへ編を継、追々御覽に入升と、其ため此序をさふふにと、江戸から上つて初舞臺、まだ口白な 川柳誌」

四世まで代々の川柳には著書といふものはなかつたが、五世は天保十六年に「狂句百味筆筈」弘化二年に「英雄百首」四年に「列女百人一首」嘉永八年に「俳人百家撰」等その外「騎人百人一首」「松竹物語」「田舎織まがひ狭衣」「勧善五常」など色々著書があることはその篤學を証してゐる。

安政五年には、初代川柳の七十回忌に、兩國の中村楼で、三晝夜に亘る空前絶後の大会を催し、集句三万八千余、選者六十三人といふ素晴らしさであつた。前の五十回忌建碑といひ、五世の床しい人格を知ることが出来る。その年八月十六日

めであられと雅を思ひ出に散る柳 (一九頁へ続く)

腕力バーのまゝ應接へ現われる
平社員だから五分でも遅刻
豆

散髮をして全快の顔になり
散髪が目立たぬ禿となりけり
髭だちを見てサンバツ屋研ぎ直し
遠足に行けと言われる儼となり
散髪屋に同情されてゐる落目
散髪の缺の止まつたホームラン
散髪屋チョコキンと煙草切つて喫み
さんばつ屋までせまきう金詰り
散髪屋のぞいて人の数を読み
テコボコの頭を虎に刈られた日
散髪の鏡のなかも春になり
散髪屋鏡の顔へ話しかけ
散髪の首すじなでる春の風
仙人掌が咲く散髪屋の暖かさ
散髪を待たされ猫の頭撫で
無口やの頭へ御世辭の出ぬ鉄
珍客を妻散髪え連れてきた
散髪をする氣で出たが吞んでゐる
散髪の嫌いなことも俺の子だ
散髪をして男前悔みに來

春 愛 勢 萬 簫 紫 種 角 永 美 淡 栗 同 同 亞 同 同 春 鮎

論 火 丹 濟 香 古 羊 客 秋 舟 仙 飲 翁 並 幸

遺書かけどかけど悲劇になつてとや
古

[illegible]

電話 福島 一六三九番

自殺する腫へ若き日が走り
 紫香
 赤旗の波をぐるく述捕狀
 勢美
 スイッチはオフの寸前述捕狀
 勢美
 いんぎんな構へて大物の述捕狀
 種美
 述捕狀なめた心でついてゆき
 勢火
 述捕狀の噂二母の宅で聞き
 古方
 御近所は水臭いもの述捕狀
 花村
 述捕狀凄く笑ひの前へ出し
 角嶺
 述捕狀(子等の寝顔を見てつき
 万客
 述捕狀自動車までを大かくる
 万客
 述捕狀母が信じていてくれ
 漢舟
 述捕狀顔着だめて見つめられ
 春軍
 述捕狀(御苦勞さんと恐れす
 野介
 あゝあゝそんな事かと述捕狀
 生々
 述捕狀まあお茶でも飲みたまえ
 豆菜
 述捕狀受取るさぬニュースに出
 栗秋
 述捕狀へ段ばしこから降りてる
 同
 山莊をゆくりと出る述捕狀
 青丹子
 述捕狀(ぐう)戸小さく開けて来る
 梧樾
 述捕狀おつとり構へたまえ立ち
 勢中
 強盜は述捕狀見てよくれむり
 亞鈴
 述捕狀に昂然となる主義をもち
 永田里十九選
 扉題「旅役者」
 文
 櫻咲く唄で落合ふ旅役者
 豆
 旅役者死んでいゝと河豚を食べ

旅役者ごつて死んだように開き
今更に足も洗えず旅役者
古くさい科白のまゝの旅役者
行くところ青雲にあり旅役者
着くところ青雲にあり旅役者
旅役者今年に座長としての宿
旅役者故郷で泣かす明烏
敵役が病んで淋しい旅役者
朝風呂で腹がへつてる旅役者
或日ふと子の命日を旅役者
名題とは一字違つた旅役者
旅役者土地の訛りで道をき
旅役者釣竿小ぢんまりと持ち
旅で病み倒れに会いたい旅役者
絶えてゐる便り氣にする旅役者
旅役者くわえ揚子で錢湯に来る
賑やかに渡舟をわたる旅役者
旅役者心配そうに雨を見る
御当地へ二度目を誇る旅役者
車中にてヒロホン射つる旅役者

大阪南支部句會

三月十八日 於 阿倍王子神社
値下・夜道・薄化粧・釣・ピストル

値下りるを食ひ税金で吐き出され
値下げ値下げ今度通れば貸家札
よきババとして肉の値下げに列んで居
よそもやるから値下断行
値下げせず置場所を換へたり
値下りだんだん殖える餘の数
まだ下がるぞ貯金まだ出来ず
煙草値下げ現内閣をちよと責め
夜道もう女の方がよい度胸
枕木を傳つて夜更に帯つて来
惚れられて居るなとおもふ夜の道
京訛りまだ抜けきらぬ薄化粧
薄化粧してお目ざめを待つて
薄化粧生けるが如き姿なり
薄化粧の化粧を夫まつてやり
薄化粧おあいもうぐらういなり
たとなみかもう鼻につく薄化粧
出張の帰る日を待つ薄化粧

警察へ叱られにゆく薄化粧
最初に釣つたはちつばけな河豚
釣つて居るもは自陣車足を止め
父の哲学釣から学んだものらしく
値下りるを待つては月給まで下り
これからは少々酔ふ値に下り
値下々々世は三月のふところ手
あれからの夜道へ母は眠て待ち
夜道には道しるべまで怖く見え
夜道とはいふなと思ふ山の月
いらんとこ照らして間につまづき
ばつたりと夜道で出逢う馬の顔
鏡跡の夜道に凄しい樹が残り
肩をならべて歩く夜道の早いこ
やくなふれて帰る夜道の早いこ
言訳を考へながら夜道行く
何にも言はず送つてくる夜の道
患ふてゐても釣竿枕もと
日曜の釣に子供を連れて行き
夜釣りしてランプの匂のつかし
釣竿に金をかけてるほど釣れず
天気晴明雑魚ばかり釣つて来る
釣れぬ日とあきらかに景色
釣仲間秘中の場所で顔が合ひ
永わすらいしてから釣も覚え
スタートはピストル空に向けて打ち
ピストルは痛しい首はうつり吊らず
ピストルがいやでたらん老巡査
ピストルのこつちからたしかに
ピストルのウォールムしほてあそび

東京支部句會(東京)

二月十八日 於 島野ビル三階
川村好郎報

値下・夜道・薄化粧・釣・ピストル
値下りるを食ひ税金で吐き出され
値下げ値下げ今度通れば貸家札
よきババとして肉の値下げに列んで居
よそもやるから値下断行
値下げせず置場所を換へたり
値下りだんだん殖える餘の数
まだ下がるぞ貯金まだ出来ず
煙草値下げ現内閣をちよと責め
夜道もう女の方がよい度胸
枕木を傳つて夜更に帯つて来
惚れられて居るなとおもふ夜の道
京訛りまだ抜けきらぬ薄化粧
薄化粧してお目ざめを待つて
薄化粧生けるが如き姿なり
薄化粧の化粧を夫まつてやり
薄化粧おあいもうぐらういなり
たとなみかもう鼻につく薄化粧
出張の帰る日を待つ薄化粧

算盤をはじき直して値がきまり
値引のこつを覚えて年季あけ
値引へ女房の智慧を借りてゆき
三味線でブギウギおこるも時世なり
半生を三味と不運がつきまじひ
弾き語り悲鳴に近い声を出し
三味線が首尾よくすんだ三味の音
流しには余りに惜しい三味を弾き
金詰り朝から三味のラヂオ消す
ラツシユアワー僕も飽きたらば
飽には約手ばかりの旅帯り
飽だけ昨夜の泊り知つてゐる
一切合さいカバンにつめて外歩
失業はしてもカバンを持ち歩き
立退きで共産主義に好意持ち
立退きの厭味階下から聞えて来
立退いたあとに縣道長く延び
立退いた先で立退き又言はれ
立退いてほしい二階に子が産れ
立退きと知らずお庭の花が咲き
値下りを素通りして金詰り
パン助へ値下り言ふつれられた

岡山支部句會(岡山市)

一月十五日 於 日展岡山会場
山分淑郎報

新春のこみ灰皿で足りる嵩
新春をラヂオばかりが目出度
裸体画をすきて仲人話を出し
墨絵でも斯く欺むくが雪景色
鑑掛けば火を吐く様な竜となり
裸婦群像抜けて羅漢につき当り
ラストシーン裸像の様に抱き合ひ
裸婦像へ妻ときさやく乳のこ
裸婦像の前でマドロスつめかへる
近付いて見れば油絵ぬりたくり
裸体画へばかり斜に足をとめ
こんな日もあつて良かつた色と線
藝術を愛し子供を忘れてゐる

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社



正一 羽山 七面山 風來子 通常 北星 大甲帽 女中 失言は お互様ですむ長屋 終

お値段の差で鉛玉は瓶に入り
半分は自分も慈しい鉛を買ひ
卒業の近い日記も職のこと
かた炭へ根負けをして床に入り
炭俵夜の巡査の手を汚し
木炭の倉庫は吉良が居そうなり
暖拂ひ基は御隠居の優利ら
暖拂ひ隣の部屋は女なり
両親の顔も知らずに靴みがき
水泡

大牟田支部句會(大牟田)

二月二十日 於 三池染料保安課
富田一葉報

鉛玉・卒業・炭・暖拂ひ・因縁・
虚栄心
お値段の差で鉛玉は瓶に入り
半分は自分も慈しい鉛を買ひ
卒業の近い日記も職のこと
かた炭へ根負けをして床に入り
炭俵夜の巡査の手を汚し
木炭の倉庫は吉良が居そうなり
暖拂ひ基は御隠居の優利ら
暖拂ひ隣の部屋は女なり
両親の顔も知らずに靴みがき
水泡

女學生モンペの母をやり過し
虚榮心唯奥様といわれたと
米ばかり食へる様な話しぶり
薫風

川 下關支部句會(下関)

二月 於 小門鉄道寮
國弘牛休門報

焼いも・落辰・競輪・旅
色氣なまごといふまいもの味 一亭
焼いものふとこをまた手の丸さ 松風
焼いもの皮もおいしい食事情 友八郎
焼いもの半分は炭となつておる 同
道きけば湯氣をひろげた焼芋屋 秋無草
焼いもの夕刊伸ばして読んだるかうたる
落辰もせずその儘の老舗なり 海朗
落辰のためだ立退きあきらめる 同
落辰に勢一ぱいのつちの音 侃流
落辰の街を切りとる道のはば 夢詩朗
落辰を配す言葉がちと詠り 秋無草
出勤の管が競輪場で出逢ひ 同
もう帰る帰ると車券買ひ続け 同
勝っただけ飲んで競輪又赤字 半休門
競輪の穴をつたを三度聞き 無詩朗
幸不幸乗せて列車は駅を出る 半休門

川 竹原支部句會(廣島)

十二月十日 於 葉留路居
弘津柳慶報

風呂・樂屋・帶・ダンス・茶碗
且那のうわさ女風呂からつゝねる 可笑
終風呂店員このまゝ寝て見にし 柳慶
入湯から声が掛つて子を買ひ 同
遠慮なくお先に這入る湯があふ 葉留路
浴槽に名残しめく今宵嫁く 芳泉
世の裏と何にか似通ふ樂屋裏 愛鳩
ピルの貸室を樂屋に大芝居 同
大部屋と見えぬ女優の樂屋入り 芳泉

ワッサ組樂屋に寒き夢結ぶ 芳郎
淡き窓樂屋の壁に名を残し 同
チヨンマゲがマドロスくわへる樂屋日 同
樂屋裏こゝにも階級あるのなり 柳慶
舞台とは別な行儀の樂屋裏 同
爛熟と樂屋裏からのでかれる 同
樂屋から出てチヨンガムは捨てられる
帯といひて見合は母え不平云ひ 愛鳩
兵子帯を巻さく降る二階階 同
帯をとく音もかなしいひるめの日 同
母親も知らずダラリの良く似合ひ 同
お通を待たして帯をしめ直し 芳泉
帯をめて太つた身体細く見せ 同
七五三鈴のなつてる帯がゆく 伊セ女
ぐるぐると帯巻いて出る若さなり 芳泉
姉妹は同じ模様の名古屋帯 柳慶
突然のお客へ帯が見当らず 同
丸帯を締めた娘を見なほして 愛鳩
上氣した顔へダンスの樂がやみ 同
タンゴでも掛けませうかと許婚 芳泉
いつ稽古したか課長のダンス振り 芳郎
老らくの恋にダンスもあつてよ 葉留路
そむく事の起りわダンスから 和郎
お茶碗も洗はず自炊寝て終い 柳慶
轉動は隣で茶碗借りて来る 和郎
國宝ともなれば茶碗に近寄れず 葉留路

川 貴生川支部句會(滋賀縣)

二月六日 於 木下親月居
黄瀬美秋報

洗濯・新聞・卒業・風邪・千田札
もうあきまへ洗濯屋に見放され 同
熱烈のレター洗濯屋に見られ 同
ひざ小僧だして洗濯する若さ 幸子
新妻の洗濯するもいゝ姿 美秋
その当座洗濯までも書く日記 春集

アルジュニアは積雪の記事見のがさず
見せてやる氣夕刊たと買ひ 柳月
夕刊に今朝の寒さを教へられ 春集
新聞の端に女工の恋とあり 夢生
卒業の記念写真のふとい足 幸子
写真交換卒業も亦樂し 斗志
卒業を待つてゐたおなかの子 夢生
女子大を出てダンサーになり下り 美秋
湯かげんに遠慮して風邪をひき 文子
なま来てダンサーの風邪もろく去に 美秋
千田札出せば財布の底が見え 幸子
夫婦して千田札をくすさぬ氣 季子
失業の身に千田札が出来よつた 親月
千田札一枚寒い散歩する 春集

川 姫路支部句會(姫路市)

二月五日 於 笑 鬼居
夷一笑報

會計
家計簿にびんと響いた祝物 和水
家計簿を見て驚いた交通費 同
會計報告すんだそろ／＼帰ろうか 燕子
赤字つゞいて會計辭職する 同
予算だけ何んとか使ふ年度末 笑鬼
引受けた會計なれど損をする 燕子
一杯を止めても會計変化なし 凡夫
これこれと算盤だけばう／＼く 孤笑
お勘定すんで話がよ／＼はすみ 揚市
千田の札に會計もの足らず 笑鬼
家計簿を見て頂戴とすれて見る 同
勘定が來てからみんな落ちつかず 揚市
新調の背廣會計疑はれ 笑鬼
帳尻が合つて會計煙草にし 同
會計をおぼせつかつた不倖せ 一笑
會計係儲る日の指の赤インク 同

川 吳支部句會(吳市)

二月五日 於 林野麴光居

過去・約束
意見する親父の過去を子は知らず
なにもかも昔の事にして嫁ぎ 麴光
過去現在茨の道はまだ続き 彩峰
指切りも無駄と知りつゝする弱さ 史居
約束の娘のまゝに五年過ぎ 操球
當てられる一幕もあり旅の宿 三六
宿帳へ其の妻と書き足袋をぬぐ 瞳

(一六頁より続く)
と辭世を残して七十二歳で終命、
築地本願寺別院に葬られた。
明治三年四月には「やはらかで
かたく持たし人ごころ」の句碑を
本願寺境内に六世が建立したが、
明治十四年五月に六世の句碑建立
の時、三回に移されて今に残つて
ゐる。

母袋未知庵著

川柳信濃國

信濃へあこがれを持つ人は多
いが、ホントの信濃を知つて
る人は少ない。先づ本書によ
つて江戸文学から、信濃を探
れ! B6 三〇頁 三三〇円 三三〇円

發行所 しなの川柳社
松本市大名町七一

Made in Occupied Japan